

## 神戸大学 OB・OG に対する年頭の辞

### 【戦うこと、闘うことの大切さ】

「戦う」と「闘う」は同じ読み方をするが、意味も使い方も異なる。大切と  
思うことは、この言葉の意味することを、「行動をするか、またはしないか」  
でその結果は己の人生や、国家の前途や、世界に対する日本の評価にも関係し  
てくる。

私の戦う……の意は、戦争の意味ではない。日本の為の正論の主張、又は反  
論の意である。憲法で禁止された交戦権によってか、国家を自力でなく外国に  
守ってもらう事を恥としない政治家も多い。これでも国家と言えるのか？

日本の政治家の弱点は敗戦に対する理解、又は開戦の理解の勉強不足によっ  
てGHQの洗脳を素直に受け取り、卑屈な心理状態を深層心理に刷り込まれ、  
信じ込んだ連中がまだまだ居るということである。

注) ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム (英語: War Guilt  
Information Program、略称: WGIP)。大東亜戦争終結後、GHQによる日本占領  
政策の一環として行われた「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつける  
ための宣伝計画」。

それ故、中国や韓国に教科書問題や歴史問題を攻撃されると、自国の正しい  
主張にも拘(かかわ)らず卑屈にもすぐ謝(あやま)り、先方の言いなりにな  
る。この繰り返しが多かったが、その結果、ありもしない慰安婦問題や歪曲さ  
れた他国からの主張を世界に宣伝され、国の品位を貶められている。この時腹  
を切る覚悟で<戦って>いたら、汚点として後世の日本人が苦勞せずに済んだ  
はずだ。

考えてみて欲しい。少し学べば戦争というものに善悪など関係なく、各国の  
国益の過度な追求の結果であると分かるはずだ。日本人が敗戦を恥じたり、罪  
悪感など持つ必要は全然ない。

”力“の差を利用した一方的侵略や、一方的・国家的掠奪行為こそ白人国家

や中国は恥ずべきである。死をも恐れず、凛として主張されたのは昭和天皇や白洲次郎ぐらいかも。国家を背負い「戦い」、論詰（ろんきつ）する武士道精神を持った人物が政治家に居なかったことが未だに歴史戦となる、愚にもつかぬ亡霊や化け物に脅かされ、踊らされる事に繋がっている。



注) 白洲次郎

昭和 20 年、東久邇宮内閣の外務大臣に就任した吉田茂の懇請で終戦連絡中央事務局（終連）の参与に就任する。GHQ の要求に対して白洲はイギリス仕込みの英語で主張すべきところは頑強に主張し、GHQ 要人をして「従順ならざる唯一の日本人」と言わしめた。

今、世界を歴史的に俯瞰（ふかん）すると、19 世紀はソ連のコミンテルンの計画通り動かされ、世界は多くの戦禍に見舞われた。アメリカも日本も。20 世紀になり共産主義は支那に移り、世界の覇道に向け走り続けている。しかし中国の悪辣な所業や、チベット・ウイグル等に対する「文化浄化」・「人種同化」などの「強制抑圧」に対する内部流出の極秘文書によって馬脚が露見し、中国を巨大な市場としか見ていなかった NATO 社会も反発が生じている。これに対し昨年 10 月には米英西側 23 ヶ国が国連第 3 委員会でのウイグル人に対する拘束禁止の共同声明や、中国によって生じる欧州経済の危機感に対しての同盟・結束等、締め付けが始まり、米国の対中政策もあって野望も頓挫している。

チェコの首都プラハの市長が中国は信頼できないと言い、北京と姉妹都市を

解消した例を見ても中国の信頼は地に落ち出している。



注) ズデニェク・フジブ プラハ市長

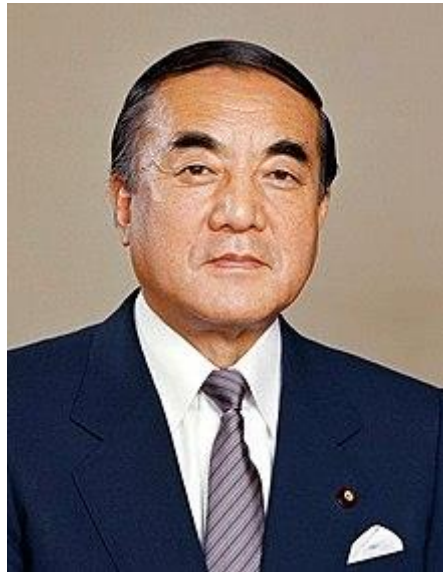
昨年10月に北京との姉妹都市を解消。今年1月に台北と協定を結んだ（左が柯文哲台北市長）。

しかし悪いことに世界は今カオスの状態にあり、民主主義は機能せず、不満や欠点が露呈し、それらがSNS（Social Networking Service インターネットを利用した社会ネットワーク）を通じて瞬く間に拡散される時代となった。このニューメディアを巧みに利用したISIL(IS)＝過激派組織イスラム国などが跋扈し、人類としての秩序・価値観・普遍性・道徳・理性・宗教的意識等が否定され、国家間に大きな軋轢を生じさせている現状である。この様な無秩序な世界に生きる日本人は、これから如何に生きるのか。思想も哲学も通用しない乱世に我々日本人は、今こそ西洋を離れ、静かに今の文明論を離れ、古事記から始まる日本思想とその文化の根源にあるものを想起することが、西洋から生じている価値不在の時代にこそ必要ではなからうか。

即ち世界は新しい価値観、「世界が信頼し合い、平和のうちに統（す）べる日本思想」から生じる価値観を求めていると思いたい。故に我々は自国の思想を「五か条の御誓文」・「17条憲法」・「教育に関する勅語」等を深く学び世界に拡散するべきだと思う。何故なら価値観はその国の歴史または歴史教育から生まれるからだ。

中曽根元首相も優秀な人物であったが、失脚する運命の胡耀邦書記という外

国首相の人事の為に、大切な靖国参拝を不可能にし、正しい歴史教科書の復活の機を作り、検定も合格した「新編日本史」を中韓の偏向教育書との反対に屈し、権力によって検定をやり直させ、それに反対した藤尾文相を罷免した。これは日韓・日中に続く歴史紛争に利用される原因となっている。この様な反論という戦いも出来ず、己の名利の為の目先の安易な対応が日本の為に後々の今に至る迄、負の遺産を生み出している。



注1) 中曾根康弘

第71-73代内閣総理大臣。国鉄民営化を成し遂げるとともに、ロナルド・レーガン大統領とのロン・ヤス関係や不沈空母発言で、貿易摩擦等により悪化していた日米関係を改善させ、強固なものとした。若手議員の頃は青年将校と呼ばれ、後に原子力関連法案の議員立法にも尽力。首相公選制を唱え、憲法改正を悲願とした。小派閥を率いる中で「政界の風見鶏」と呼ばれることもあった。当時中国共産党指導部の胡耀邦総書記ら親日傾向を持つグループとその反対勢力との権力争いがあり、その中で靖国参拝が問題として浮上。自身の著書の中で中曾根は「親日派の立場が悪くなることを懸念し靖国参拝を中止した」としている。

一時の単なる擁護の政治判断や、「戦う気概」の無い一時逃れの「逃避の一言」が後で日本の大きな障害となって国家の大きな害となる。これの大元の原因は日本精神であり少林寺拳法の訓（おし）えでもある「濟生利人の為に修行し、『決して自己の名利の為に』なすことなし」……この日本精神の「自己の名利の為に生きない」という「心の闘い」の精神が中曾根元首相にあれば、胡耀

邦に対する答えも、例の第二次教科書事件の結果も違っていたはずだ。即ち外圧に対して「戦い」の言葉が逆（ほとぼし）ってたはずだ。「闘う」は克己・無私・愛国心が無ければ発生し得ない真理だ。戦う気概は「闘う」精神から生まれる。この関係をよく理解し、政治家や指導的立場にある人物は胆に修（おさ）めて欲しい。

もう一つ訴えたいことがある。政治家によくあることだが「歴史認識問題」・「憲法問題」・「侵略戦争問題」・「教科書問題」を専門家に任せると逃げる人や政治家が居る。我々は歴史の専門家や歴史学会の学者に判断や答えを任せてはならない。彼等の固定観念に我々は任すべきでない。専門家や学者の答えは「信仰」・「迷信」の域にある人が存在すると西尾幹二氏は述べているからだ。

例を挙げると、「日本史学会」のボスと言われる人であった、マルクス主義者である永原慶二氏の「20世紀日本の歴史学」には「新しい教科書を作る会」の批判に次の表現がある。「戦後の日本史学界は東京裁判史観という『正しい歴史認識』に恵まれた王道を歩んで来たのに、『つくる会』というとんでもない異端の説を唱える者が出て来てけしからん」という意味の文章が書かれている。これはマルクス主義左翼の学者がGHQのアメリカ政策を頼りにしてきた証拠である。

注) 新しい歴史教科書をつくる会

1996年に結成された日本の社会運動団体。従来の歴史教科書が「自虐史観」の影響を強く受けているとして、「東京裁判史観」ないし「コミンテルン史観」にも与しない立場から新たな歴史教科書をつくる運動を進めるとしている。

これが学者と言われる人達の憲法論ならば、日本の将来はどうなるのであろうか、空恐ろしいことだ！！

(この頁は西尾幹二氏から参照)

令和三年1月25日

神戸大学少林寺拳法部 監督 有馬正能